

岩田彦作と申者、白石の舊友にて學を好候て、一見識あるものに候。此者天道は無之ものと埒明け申候。それを異論と申者今一人有之候て、白石へ折衷可仕とて、先年新井氏甲府に被仕候時分、一日此詮議有之よし。彦作申候は天道は善に福し、惡に禍すと申候得共、善惡の報一つも合不申候。それを天道と申もの有之様に申候故、却て人疑心出來候て惡敷候。最初より人たるもの善を勉め申候は、報に心を置申候にては無之、己が當然の事にて候。福善禍惡の説をば、一向に捨候て己も修行し、又人にも教申べきよし、達て情ごはに申候由咄に御座候。私申候は、聖人の教に天道福善禍惡と被仰候事、佛氏の方便など、申候にては無之候。譬ば主君に忠功仕候へば、賞を得申候。不忠に候へば、罪を得申と申様成事に候。去共忠節の者却て罪を得、不忠の人却て賞を得申事、毎々有之候。左様に有之候ても、不奉公の人、却て賞を得べしとは不被申候。君道をのべ申時は、忠に賞あり、不忠には罰ありと申管に候。本より忠臣の心、賞を目にかけ忠を盡し申にては無之事、勿論に候へ共、君道は忠をば賞する管、惡をば罪する管と申所は、兎

角かへられぬ事にて候。岩田が論誤りにて候へども、觀過知仁と申類にて候。善惡の報に心を付申事、聖人の教にいやな事と存候て、此論を申出候へば、其志の正しき所知申候よし、新井氏へも申候。此彦作、近頃秋元但馬守殿此時御老中へ新座者に被呼出候處、無程家老に被申付候。其上通鑑綱目數寄にて、毎度聞被申由に候。然れば頼母敷所有之、珍重に奉存候。

一、北條安房守役筋堅固に被守事  
新井氏被申候は、先刻北條安房守被參候て、暫語り被申候。今の安房守祖父安房守、嚴有院様御時、大目付役に候。何哉覽大事の公事候て、御老中方其外役人中御寄合、御詮議一決にて、何も同心の躰にて候處、安房守一人とかう不被申候故、酒井雅樂頭殿被申候は、安房守一人是非の事不被申候。外に料簡も有之候哉承度旨被申候處、安房守其時被申候は、御尋に候間申上候。私は此御裁判の趣、御尤に不存之旨被申候。其時名人の伊豆守殿被申候は、それは意地のわるきと申物にて候。是程各詮議候て存寄を申候所に、不同心に被存候はゞ、早速其段不被申候て、雅樂頭殿

別に御尋候へば、左様に被申候。若御尋無之候はゞ不同心の儀を、其儘聞て被居候はんとの儀に候やと、とがめ被申候處、安房守被申候は、扱は唯今迄私役儀の筋違、あしく心得罷在と奉存候。私心得申候は、大目付役被仰付置候は、目付の役の儀は其詮議の座に加りて、各様被仰候趣を黙して承り、上より御尋も有之時分、かやう／＼に各詮議仕候と、其趣申上候役と存罷在候。若各様同事に料簡を申候ては、各様同役と申物にて候。か様に心得罷在候故、唯今迄私料簡不申入候得共、雅樂頭殿別段の御尋に候故、不尤と存候儀を、尤とは難申候ゆゑ、有様に申候。然處伊豆守殿被仰に付て存候へば、扱は唯今迄役儀の筋、心得違にやと存候旨被申候得ば、流石の伊豆守殿一言も無之候。其時雅樂頭殿、成程尤に存候。然共是は格別の儀に候間、御料簡の趣承度のよし被申候に付、安房守料簡被申候處、各是に同心にて終に其通に罷成候由。此時分迄は老中役人等、か様に我役儀を常に守被申候。御老中も御政務の儀、心を被盡候て下問を恥不被申候。伊豆守被申様も、いひそこなひにても可有之かなれ共、觀過知仁にて候。申にくき所を被

申候事、天下の御爲を大切に被存候ゆゑ、少にても心底を殘し申儀をとがめ被申候。此時分迄は、か様に有之よし先刻安房守被申候よし、新井氏被申候。又安房守被申候は、堀田筑前殿名譽の人にて候。父安房守町奉行役被仰付候時分、筑前殿へ禮に罷越候へば逢被申、大役被仰付候間、隨分精を出し勤可被申候。但公事沙汰聞被申時分、相手に不罷成候様に心得被申事、第一に候よし被申候。其時分は替たる儀を被申とのみ存候て罷在候處、後に能存當り申儀ども有之候。公事聞申時分、公事に出申者に、罷成候て、申立させぬ様に仕度ものにて候。是は公事を承候にては無之、公事の相手に罷成と申物にて候。虚心平懐に仕候てさへも、是非聞違有之儀に候。此方に怒氣候ては、理非違申管に候。相手に不罷成様にとの一言、面白き儀のよし安房守被申候由、新井兄被申候。此安房守も父祖の筆法有之と見申候。それ故に文昭院様御時、大坂町奉行被仰付候旨。  
一、秀吉公の仰言に神君の御怒  
大猷院様御時、細川三齋、子息越中守殿へ肥後被下候御禮として、江戸へ被參候處、事外御馳走にて、昔の物語共御